

ダニエル書 - 第141番

教皇権の復活と第8代大統領の預言的意義を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-17

私たちは現在、教皇権が「七つの頭」に属する第八の頭として地の王座に復帰する歴史における預言的特徴を、つぶさに検討しています。これは、七人の大統領に属する第八の大統領が、教皇制の獣の像の形成を成し遂げる時代の預言的特徴を慎重に見極めるためです。私たちは、カルメル山とヘロデの誕生日から、これらの真理の考察を始めました。これら二つの聖なる象徴はいずれも、間もなくアメリカ合衆国に到来する日曜法を表しており、それはダニエル書11章41節にも表されています。

彼はまた美しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

この聖句では、偽りの北の王が麗しの地に入る。古代イスラエルの歴史において、麗しの地とはユダの地のことであり、そこは乳と蜜の流れる地としても表現され、そのことを含むいくつかの理由から麗しの地とされた。また、キリストがその首都エルサレムをご自身の神殿の場所として、そしてご自分の名を置く都として選ばれたためでもあった。

わたしがわたしの民をエジプトの地から導き出した日以来、イスラエルのすべての部族のうちから、わたしの名をそこに置くために宮を建てるための町を、わたしは選ばなかった。また、わたしの民イスラエルの上に治める者として人を一人も選ばなかった。しかし、わたしはエルサレムを選び、わたしの名をそこに置くことにした。また、ダビデを選び、わたしの民イスラエルを治める者とした。歴代誌下 6:5、6。

文字どおりのユダの地は、文字どおりの古代イスラエルにとっての栄光の地であり、アメリカ合衆国は霊的なユダの地、霊的な現代イスラエルにとっての栄光の地である。

主が、ご自分の民がそれぞれの良心の命ずるところに従って主を礼拝できるよう、その避難所として備えられ、長年にわたって全能者の御盾がその上を覆い、神がキリストの純粋な宗教を託してこられたその地が——その立法者たちを通してプロテスタント主義の原則を放棄し、神の律法に手を加えるローマ・カトリックの背教を是認するに至るとき——そのときこそ、罪の人の最終のわざが明らかにされる。『時のしるし』1893年6月12日。

偽りの北の王は、四十節で1989年に南の王（旧ソ連）を征服したのち、栄光の地（アメリカ合衆国）を征服する。四十一節では「countries」という語は補って挿入された語で、完全に正確ではない。というのも、日曜法において打ち倒される「多くの者」は、日曜法が到来する前から、第七日の安息日と太陽の日との区別を知っていた一群の人々だからである。

安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし（印）である。第四戒の要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者は、そうすることによ

って、それを命じている唯一の権威に服従を表明していることになる。獣の刻印とは教皇制の安息日であり、それは神の定めた日に代えて世界に受け入れられてきたものである。

しかし、預言で定められている獣の刻印を受ける時は、まだ来ていない。試練の時も、まだ来ていない。ローマ・カトリック教会も例外ではなく、あらゆる教会に真のクリスチャンがいる。光を受け、第四の戒めに従うべき義務を悟るまでは、だれも罪に定められない。だが、偽りの安息日を強制する布告が発せられ、第三天使の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して人々に警告するとき、偽りと真理の間にはっきりと一線が引かれる。その時、なおも背きを続ける者たちは、額か手に獣の刻印を受ける。

私たちは急速な歩みでこの時期に近づきつつある。プロテスタント諸教会が、彼らの先祖がその反対のゆえに最も激しい迫害に耐えた偽りの宗教を支えるため、世俗の権力と結びつくとき、教会と国家の連合した権威によって教皇制の安息日が強制されるであろう。国家的な背教が起こり、それは国家的破滅にしか終わらない。バイブル・トレーニング・スクール、1913年2月2日。

間もなく到来する日曜法の時に打ち倒される「多くの者」の一群とは、安息日の光に対して責任を問われる者たちであり、その光はその時のために与えられた光で、教会と諸国民双方の歴史における転換点であり、危機でもある。その一群こそ、反逆の荒野をさまよってきた末に行き着いたラオデキア的アドベンチズムの教会である。そこで彼らは主の口から永遠に吐き出される。ラオデキア的アドベンチズムとは、第三天使の光へと召された者たちで、彼らは1844年から1863年に至る歴史における第一のカデシュ、または2001年から日曜法に至る歴史における第二のカデシュの時に召されたのである。

王は彼に言った、「友よ、どうして婚礼の礼服を着ないでここにはいつて来たのか。」彼は黙っていた。そこで王はしもべたちに言った、「その男の手足を縛って、連れ出し、外の暗闇に投げ込め。そこで泣いて歯ぎしりすることになる。」招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。マタイによる福音書 22:12-14

第三の天使の声は、1844年であれ2001年であれ、婚礼への招きであった。日曜法のときに打ち倒される「多くの者」とは、キリストの義という婚礼の衣を拒み、その代わりに、十人の王によるローマの淫婦との婚礼の一行に加わった「多くの者」のことである。その婚姻では、人は自分の衣を着たままでよい。恥を取り去るのに必要なのは、十人の王を支配するその淫婦の姓で呼ばれることだけだからである。

その日には、七人の女が一人の男をつかまえて言う。「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣を着ます。ただ、私たちの恥を取り去っていただくために、あなたの名で呼ばれる者とさせてください。」イザヤ書 4:1。

彼らは最初の食に関する試験に不合格となった。天からのパンではなく、自分たちのパンを食べることを選んだからである。彼らは第二の試験にも失敗した。本来は神の御性質を現すことによって神をさがめるべきであったのに、代わりに自分たちの衣を身にまとうことを選んだからである。彼らは第三のリトマス試験にも不合格となった。キリストの名（品性）を拒むことを選んだため、獣の名（品性）を現したからである。バビロンが最初に言及される箇所において、ニムロドが都市（国家）と塔（教会）を築いた目的は、自

分の名を上げることであった。

彼らは言った。「さあ、私たちのために町と、頂が天に届く塔を建てよう。私たちの名を上げよう。そうでないと、私たちは全地に散らされてしまう。」創世記11章4節

名は品性の象徴であり、七つに属する第八の獣の預言的性質は、教会（塔）と国家（都市）の結合における二重の性質である。終末の危機において、人々は二つの階級に分かれる。

二つの階級しかありえない。それぞれの陣営は、生ける神の印か、獣またはその像の刻印のいずれかを、はっきりと印されている。アダムのすべての息子と娘は、自らの総帥として、キリストかバラバのいずれかを選ぶ。そして、不忠の側に身を置く者はみな、サタンの黒い旗のもとに立っており、キリストを拒み、侮辱して扱った罪に問われる。彼らは、命と栄光の主を故意に十字架につけた罪に問われる。Review and Herald, 1900年1月30日。

一方の階級は獣の像を表し、もう一方の階級はキリストの像を表す。一方はキリストの婚礼の衣を着ており、もう一方の階級は「自分の衣服」を着ている。一方の階級は天の食物を食べ、もう一方は「自分のパン」を食べている。自分のパンを食べ、自分の衣服を保ち続ける階級は、第三の天使の声によって招かれた「多くの者」を表しており、彼らは間もなく到来する日曜法において打ち倒される「多くの者」である。日曜法の危機において彼らの品性が顕わになったとき、失われた状態を贖い戻そうとする彼らの試みは、「ローマの淫婦」の名を受け入れさえすれば、そのことによって自分たちの「そしり」が取り除かれるという偽りの希望にほかならない。

そのとき、選ばれた少数の者たちが、十四万四千人の旗印として掲げられる。そして、四十一節には、偽りの北の王の手から「逃れる」もう一つの群れがいる。四十一節で「逃れる」と訳されているヘブライ語は、あたかも滑りによって逃れるという意味で、その定義は、水の中で石けんを握っていると、その滑りやすさのために手からすり抜けてしまうというイメージを伝えている。この語がヘブライ語で用いられる場合の定義の主要な要素は、何であれ逃れるものは、逃れる以前には、それから逃れる相手の支配下に置かれていた、という点である。

第41節では、竜と獣と偽預言者の三者の結合が成し遂げられる。

「米国のプロテスタントは、隔たりを越えて手を差し伸べ、心霊主義の手を握ることにおいて先頭に立つだろう。彼らは深淵を越えて手を伸ばし、ローマの権力と手を結ぶだろう。そしてこの三者連合の影響のもとで、この国は良心の自由を踏みにじる点でローマの跡を追うことになる。」『大論争』588。

アメリカ合衆国が国際連合および教皇権と、日曜法において手を結ぶとき、かつて教皇権の手中にあった人々の一群が、偽りの「北の王」の手から「逃れる」。その人々は以前、教皇権の手中に握られていた。彼らは、ヘロデの誕生日の宴において、ローマの地下牢に囚われ、死か解放かを待っていたバプテスマのヨハネによって表されている。日曜法のとくに教皇権の捕囚から逃れる人々の階層は、三つの部族によって表されており、ゆえに現代のバビロンの三重の構成を象徴している。

まさにその時、黙示録18章の第二の声が、人々にバビロンから逃げ出すよう呼びかける。そうすれば、その時始まろうとしている彼女に下される裁きにあずからないで済む。その第二の声はキリストの声であるが、同時に、その時大声で第三の天使のメッセージを宣べ伝えている十四万四千人の声を代表している。手（服従の象徴）から逃れる者たちは、偽の北の王の手から逃れ、真の北の王の手を見いだす。

カルメル山でバアルの預言者たちは殺された。彼らが奉じる男性的な偽神は国家を表し、アシュタロテの預言者たちは教会を表す。エリヤはバアルの預言者たちを殺し、これによって第六の王国の終焉が示されたが、サロメに象徴される背教的プロテスタンティズムはなお残っていた。サロメ、すなわち背教的プロテスタンティズムは、サロメとしてヘロデを誘惑し、十人の王は、七つの頭のうちから出た第八の頭と政教同盟を結ぶことで合意する。サロメこそ、近親相姦のヘロデが心の内で情欲を燃やす相手である。

しかし、わたしはあなたがたに言う。女を見て情欲を抱く者はだれでも、すでに心の中でその女と姦淫を犯したのである。マタイ 5:28

ヘロデの心のうちの近親相姦の情欲が、彼の心のうちで二人の肉を一つにし、それゆえ彼はサロメと一体となった。

それゆえに、人は父と母を離れ、妻に結びつき、二人は一体となる。創世記 2:24

ヘロデの誕生日の宴で、ヘロデとサロメは一つとなり、アハブを型とするヘロデは、北王国の十人の王の長である。間もなく到来する日曜法の時に、教会と国家の角の結合（獣の像）を示す一つの角となっていたその角がエリヤによって打ち倒されるとき、地の獣の第六の王国は終わる。その後、サロメはヘロデを誘惑して彼と一つとなり、自分の母（全世界的な教会）に王国の半分（全世界的な国家）を与えるよう彼を説得する。こうして、十人の王は皆互いに一致しているので、サロメはアハブとその十の部族を掌握した。

あなたが見た十本の角は十人の王たちで、彼らはまだ国を受けてはいない。しかし彼らは、獣とともに一時の間、王としての権威を受ける。彼らは心一つにして、自分たちの力と権威を獣に与える。黙示録 17:12、13。

彼らとその権力と力を与える獣は、淫婦が乗っている獣である。その獣は像の性質を表しており、その像とは教会と国家の結合で、関係を支配しているのは女（教会）である。というのも、それはラテン式の婚姻で、そこでは姓は妻の姓となり、女が男を支配するからであり、これは真の婚姻関係への反逆である。

女に向かって言われた、「わたしはあなたのはらみの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう。」創世記 3:16

十人の王たちは、心一つにし、意を一にしている。

黙示録17章13-14節を引用。「彼らは一つの思いを持っている。」普遍的な結束、一つの大いなる調和、サタンの勢力の連合が生じるであろう。「そして彼らは自分たちの権力と力を与えるであろう。」このようにして、宗教の自由、すなわち良心の命ずるところに従って神を礼拝する自由に敵対する、同じ恣意的で圧制的な権力が現れるのである。これは、過去において、ローマ教皇制が、ローマ主義の宗教儀礼と典礼

に同調することを敢えて拒んだ者たちを迫害したときに示したものと同一である。

終末に行われる戦いにおいては、エホバの律法への忠誠から背教したあらゆる腐敗した勢力が、神の民に敵対して連合する。この戦いでは、第四の戒めである安息日が最大の争点となる。というのも、安息日の戒めの中で、偉大なる律法の与え主がご自身を天と地の創造主として示しておられるからである。
セブンスデー・アドベンチスト聖書注解、983。

指導者はアハブ、またはヘロデである十人の王たちは、ヘロデヤの娘サロメに誘惑された。日曜法のと看、背教的プロテスタントの偽りの宗教であるサロメに誘惑され、かつ以前は聖書の預言における第六の王国であった国際連合が、十人の王の王国を掌握する。十人の王たちは皆、自らの王国の半分をカトリック教に与えることに同意する。彼らはこの決定を満場一致で下す。なぜなら、すべての王がサロメの誘惑的な踊りに魅了されていたからである。彼らは、バプテスマのヨハネによって象徴される者たちを殺すという業に、自分たちの結集した力を投入することに同意する。

獣（国際連合）は、イゼベルの娘である第一の王によって支配されている。イゼベルは、娘にヘロデヤ他の王たちとの姦淫と近親相姦の関係を始めるよう指示した。なぜなら、彼女は淫婦たちの母だからである。彼女は自分の娘の売春の元締めである。ヘロデ、アハブ、そして国際連合は、偽預言者であるアメリカ合衆国に誘惑された。アメリカ合衆国は、バアルの預言者たちが殺されたとき第六の王国ではなくなり、アシュタロテ（サロメ）の預言者たちが直ちに第七の王国の統治勢力となって、アメリカ合衆国でたったいま成し遂げたことを世界でそのまま再現する。

獣は、淫婦の娘と関係を持つ王たちであり、淫婦は獣を支配する女である。イエスは、ある事柄の終わりを、その始まりによって示す。黙示録第17章における八つの王国の描写がダニエル書第2章の八つの王国の封印を解いたのと同様に、獣とその上に乗る女は、初めが終わりを表すということに基づいた別の預言的真理の封印を解く。

ヨハネの黙示録17章は、聖書の預言における諸王国への最後の言及である。したがって、聖書の預言における諸王国への最初の言及であるダニエル書2章も、預言上の必然として八つの王国を表さなければならず、そのうち第八の王国は七つに属するものである。同様に、17章における女と彼女が乗る獣への裁きは、1798年の淫婦に対する最初の裁きにおいても表されていない。

第十七章の冒頭で、天使はヨハネに、大淫婦と、その女がまたがっている獣に対する裁きを示すと告げた。大淫婦が初めて裁かれた時は、教皇制が致命的な傷を受け、終わりの時が到来した1798年のことだと正しく理解されてきた。しかし、預言史において「終わりの時」が表されるときには、いつも人によって象徴される二つの道標がある。アロンとその兄弟であるモーセの誕生は、その歴史における終わりの時であった。これら二つの道標は、洗礼者ヨハネの誕生と、その六か月後の彼のいとこイエスの誕生を予表し、こうしてその歴史の終わりの時を画した。1798年の終わりの時を象徴する七十年の捕囚の終わりにおいては、ダレイオスとその甥キュロスが終わりの時の二つの道標である。彼らは共に、1989年の終わりの時におけるレーガンとブッシュ（父）を予表している。

1798年は、ミラー派の歴史においてダニエル書の封印が解かれた「終わりの時」であり、カトリックの獣の政治的要素の預言的な死を示した。ナポレオンの将軍ベルティエがバチカンに乗り込み、教皇を逮捕して、カトリックの獣の政治的権威に終止符を打った。その翌年の1799年、何世紀にもわたってその獣にまたがってきた女、すなわち教皇によって代表されていた者が、幽閉の身で死んだ。淫婦への裁きには、彼女が諸国民を治めるために用いた獣に対する裁きも含まれる。黙示録17章は、獣に対する裁きと、獣を支配しその上にまたがる淫婦のことの両方を明らかにしている。

「世界は嵐と戦争と不和に満ちている。だが、人々は一つの頭-すなわち教皇権-のもとに結束し、神の証人において現される神に敵対する。」『証言』第7巻、182。

第八の頭、すなわち七つのうちのものは、獣を支配する教皇権である。その獣は、獣にまたがる淫婦の娘に統治される十人の王から成り立っている。第八の王国、すなわち七つのうちのものの諸要素は、アメリカ合衆国内で獣の像が形成されるとき、七人の大統領に属する者でもある八番目にして最後の大統領のうちに見いだされなければならない。背教的な共和主義とプロテスタント主義の角の結合体には、獣の像を支配する「頭」がいなければならない、その支配者は並外れた独裁者となるだろう。

次の記事でこの研究を続けます。

アサフの詩歌。神よ、沈黙しないでください。口を閉ざさず、じっとしておられないでください、神よ。見よ、あなたの敵は騒ぎ立ち、あなたを憎む者どもは頭をもたげています。彼らはあなたの民に対して狡猾なはかりごとをめぐらし、あなたに守られている者たちに対して協議しています。彼らは言います、「さあ、彼らを国として断ち滅ぼし、イスラエルの名が二度と思い起こされないようにしよう。」彼らは心を一つにして共に謀り、あなたに逆らって同盟を結んでいます。エドムの天幕、イスマエル人、モアブ、ハガル人、ゲバル、アンモン、アマレク、ペリシテ人とツロの住民。アッシリアも彼らに加わっており、彼らはロトの子らを助けています。セラ。詩編 83:1-8